

三河の昆虫

No. 1 1973年1月

〒448 刈谷市井ヶ谷町
愛知教育大学昆虫研究室内
三河昆虫研究会 発行
第一プリント社 印刷
☎ ◯564 ◯4463

〉私の主張〈

身近にいる昆虫標本を大切に

大平仁夫

最近、あちこちに外国産の美しい蝶や甲虫などを売る商社ができてきて、誰でもほしいものは入手できるようになった。私たちの周辺では簡単にみられないこれらの標本を入手して身近におきたい気持ちはわからないではないが、金で買った標本は、金以下であっても決してそれ以上のものではない。第一に愛情がわかない。一匹のモンシロチョウでも、それを苦心して採集したものであれば、私たちは、その虫を通してさまざまな愛情や愛着を感じることができるのである。それに、外国産の蝶などが望外の高値で売られていることにも問題がある。現地では無料同然のものが、日本へ入ってくれば何千円もしているのである。関税がかかっているのだろうか。中には、こういうものを集めて並べることに夢中になっている人もいるようだが、研究などの必要があってどうしても入手できないものは買うことも必要だろうが、ほどほどにしておかないと、収集欲のとりこになりかねない。私たちの身近には、よくみると美しい昆虫がいくらでもいるのだし、調べなくてはならないことが山積みしているのである。身近な郷土の昆虫を調べるのが私たちの生きがいではなくてはならないと思うのです。

愛知県で発見されたクロツバメシジミ

鈴木友之

本種は1919年に長野県上田市で発見されて以来各地で産地がみつき、今では本州、四国、九州のうち20の県に産することが判明しているが、関東の大部分と東北、北海道からは産地が発見されていない。東海地方では、岐阜県高山市が知られているのみであるが、1970年春に静岡県水窪町山住地内で発見され、同年夏には10数kmはなれた同町地内でも発見された。そして、同年秋には愛知県南設楽郡鳳来町でも見出されるに至った。上記の三ヶ所とも、同好者の学生諸氏が昆虫採集の途上で偶然にみつけたものである。調査の結果、いずれも山間部の南向き斜面で、附近にはツメレンゲの自生が確認された。鳳来町の調査で現在まで判明したことを記すと次のようである。

1. 発生期について

4月より10月後半にわたって世代をくりかえして発生し、各世代による個体数の増減は大きい

そのピークは4月末から5月上旬、8月、9月末～10月前半に現われた。調査回数が十分でないので不確実であるが、丁度梅雨期にあたる6月から7月に第2化の発生を考えると、年4化と推定される。

2. 食草について

上述のツメレンゲは、同定に間違いはないが、他のベンケイソウ科の植物を食べることも知られているので、幼虫は他のベンケイソウ科の植物を食べていることも十分考えられる。

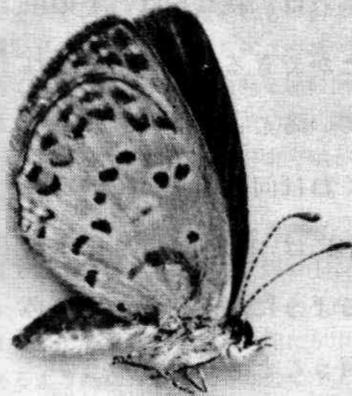
3. 環境について

上述の水窪町の2ヶ所をふくむ今回の例とも共通していることは、道路ぞいの南向き斜面で、反対側には流れがあり、露岩上には地衣類やイワヒバなどが散見され、きわめて限られた区域に生息するのみである。

4. その他について

成虫の翅表は暗褐色で、後翅尾状突起はきわめて短いので、外見はヤマトシジミに似ている。外見上の雌雄の判別は容易ではない。季節による変異はないと云われているが、産地によって斑紋に差が認められる点や、西日本の産地は平野部に多く、中部日本では長野県を中心とした山間地に多いのはなぜだろうか、遺存的な性格が強いといわれるので、食草の分布によるものか興味のある問題である。

終わりに、生息地域を詳しく述べなかつたのは、水窪町山住の例のように、公表と同時に乱獲のためか絶滅状態になることを恐れたためである。



鳳来町で採集されたクロツバメシジミ

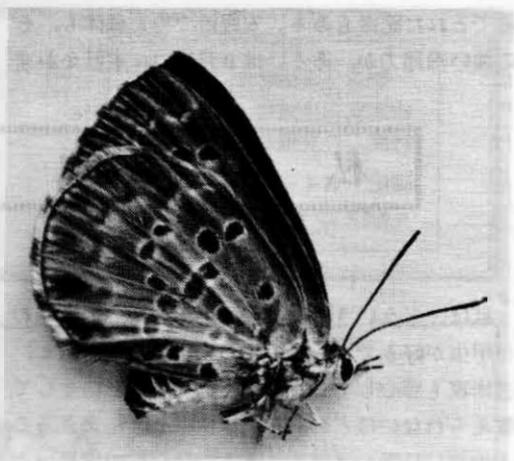
新城市でクロシジミを採集する

竹本秀邦

私がクロシジミをみつけたのは、全くの偶然である。1972年7月20日、バイクで新城の山を観察

に行った折、途中で道がなくなり、車両通行止になっていた。人も車もほとんど通らない所である。

そこから歩いてもう少し登ってみた。すると、一匹のシジミチョウが草むらの中から踊り出た。チョコマカとすばしこい、シジミチョウ独特の飛び方で、あっちへ、こっちへと忙しそうに動く。やがて葉の上に静止したので、よくみればクロシジミの雄であった。私は愛知県下での本種採集は、ほとんど耳にしたことがなかったので、これは珍しいとばかり、慎重に捕獲した。事実、県下での本種採集記録は少なく、最近では全く記録がなく、大きな成果を上げることができた。一週間後できるだけ朝早く、再びその場所を訪れたとき、私はビックリした。何故なら、かなり多くの本種が一度に飛び出したのである。草むらから弱々しく飛び出し、長い草の葉にぶら下がってとまる。時に雌が多く新鮮である。採集は容易で、雌雄ともに草に訪れ、花には来なかった。また、昼に近づくと従って、その動きは活発となり、高いクヌギの上をすばしこく飛び雄も多くみられた。この



新城市で採集されたクロシジミ雄

場合の本種の将来は困難であった。

モンシロチョウの初見日について

鈴木 栄二

わたしたちの最も身近なところにおいて、それでいてなんとなく忘れられているのが、モンシロチョウではないかと思えます。

最近、急速な都市開発ということで、増々自然に親しむ機会が少なくなっています。しかし、まだまだこのモンシロチョウは、気をつけていさえすれば、見られるのではないのでしょうか。そんな小さな目を向けてみて下さい。愛知県における初

見日(初めて見かけた日)は、3月18日となっています。私は、岡崎では3月27日(1970年)、3月22日(1971年)とともに少しおそく観察しています。初見日を左右する要因は、いろいろなことが考えられると思いますが、毎年記録をとってゆくことによって、その変異をとってみるのもおもしろいと思います。

オオキンカメムシを安城市で採集

久永 和彦

県下における本種の記録は、荒川氏の伊良湖岬〔虫譜、2(2・3)、1952〕、鈴木氏の渥美郡杉山村、大平氏の伊良湖岬〔中部昆虫同好会会報1(5・6)、1954〕などがあるが、筆者は1972年10月7日、筆者の勤務する安城農林高校の花木園で「マサキ」(他の記録では、ウバメガシ、ヤ

ブニッケイ、アカメガシ、ハマイサカキなどがある)の葉上に静止していた1個体を採集した。

本種は、もともとアブラガリの害虫として知られ、九州や四国地方に多く、本州では島根、福井などのアブラガリの産地に多い。また、飛ぶ力が強いので、近年岐阜県の飛弾の山地や東北、北海

道でとれた記録もある。安城市で得た個体も、その強い飛翔力か、あるいは9月17日に本県をかす

めた台風20号の落とし子とも思われる。

私と昆虫 —その1—

山崎隆弘

私は、どういうわけか、昆虫のなかでもとりわけ甲虫が好きです。あの宝石にもまさる光沢と、芸術家も感心してしまうほどの珍奇な形、そして数えられないほどの種類、甲虫はまさにあきることのない科学の世界へ、あるいは空想の世界へと私を誘ってくれるのです。

さて、その私が昆虫採集に出掛けるともなれば山男まがいの服装をして、一人前の採集道具を背に手にして行きます。ところが、昔は大変なものでした。服装はふだん着のまま、ボール箱とくすりびん、それに布の捕虫網を持って出掛けたのです。ある日、ブラブラと田舎を歩いていると、警察官に呼びとめられ、「君は何をしているの、その袋の中には何が入っているのだ、／＼」と聞かれたのです。私は堂々と「昆虫採集をしている。中はホレこれがドクベンで、これが……」と説明してシャンとしていました。警察官も半信半疑、その道具をジロリと眺めそのうちにブツブツ云いながら行ってしまいました。今当時を思い出すと、よくもまあ、あんな変なテイサイの悪い道具をみせてイバっていたもんだと自分ながら感心しています。

それから、私が虫を集め出したころは、別に甲虫ばかりではありませんでした。蝶やトンボ、そして蛾からハチ、アブに至るまで手当たり次第に集めていました。ところが、いつの間にか甲虫ばかりを集めるようになってしまったのです。なぜそうなったかは自分でもよくわかりません。またまた大平先生の所で、あのすばらしいコメツキムシのコレクションをみせていただいたのが、そのキッカケになったのでしょうか。そこで、私は甲虫のなかでも特にサルハムシとかツツハムシなどを少しずつ集めるようになりました。おかしなもので集めれば集めるほど、この小さな世界がますます大きく広くなってゆくのです。ある人にとってはサルハムシが木から落ちたからといって何という



ことはないでしょう。でも、この世の中にそれを眺めたり研究したりするひとがいるということは愉快ではありませんか。

おわりに、昆虫採集を通して小さな虫たちからいろいろなことを教わり、考えさせられました。おかげで少しは利口になったかも知れません。そして、すばらしい友人も沢山できました。とても有難いことです。今後もそれはどこまでも続いてゆくことでしょう。それが私と昆虫の道です。